「氷壁」論
―「孤独」と「信頼」―

高木伸幸

はじめに

井上靖の「氷壁」（昭31・11・24～32・8・22『朝日新聞』）は、いわゆるナイロン・ザイル事件に材を取った小説である。昭和三十年一月二日、前穂高東壁において岩稜会パーティのナイロン・ザイルが切れ、メンバーの若山五朗氏が墜死した。以来、遭難者側はナイロン・ザイルに欠点があることを主張し続けたのに対し、ザイルメーカーの東京製綱は大阪大学教授篠田軍治氏を責任者にして、ナイロン・ザイルの強度を誇示するかのような公開実験を行い、両者の間に論争が繰り広げられた。そのナイロン・ザイルに関わる遭難と論争の事件について、井上靖は登山家の安川茂雄から送られた『ナイロン・ザイル事件』（昭31・7、岩稜会）と題する報告書を読んで興味を覚え、遭難パーティの一人であった石原国利氏や、若山五朗氏の実兄で、『ナイロン・ザイル事件』の筆者である石岡繁雄氏ら岩稜会の面々にも詳しく話を聞き、「氷壁」の筆を執ったのである。[1]

これまでこの実際に起こったナイロン・ザイル事件が、「氷壁」に如何なる形で取り入れられているのか、詳しく論じられてきたとは言い難い。例えば、福田宏年氏は「解説」（新潮社版『井上靖小説全集』13、昭48・8）や『増補井上靖評伝覚』（平3・10、集英社）で、石岡繁雄氏の「前穂高に弟を失う」（昭33・3『講座』第二号）と題する文章を参考に、その「事件の概要」を記しているが、それらにおいてモデルと小説との関係に深く立ち入った考察は為されておらず、あくまで事実の簡略な紹介にとどまっている。[2] また木谷喜美枝氏は「『氷壁』の世界」（昭61・5『現代文研究シリーズ16井上靖』）で、前穂高東壁での遭難の事実を確認しつつ、小説のモチーフを分析しているが、後述するように、そこで参考に用いられた新聞記事[3]にやや不正確な部分が存する故に、これも必ずしも適切

な考察になり得ていない。「氷壁」における井上靖の意図を把握するためにも、モデルと小説とのより正確で具体的な比較検討を行う必要があろう。

私は本論の執筆にあたって、石岡繁雄氏に直接当時のお話を伺い、『ナイロン・ザイル事件』のコピーを手に入れることができた。[4] 同書は岩稜会の主張を記した本文篇74頁と、98項目に及ぶ資料を掲載した関係資料篇210頁とより成る合計全284頁のガリ版刷りの報告書である。同書を手がかりに作者の材料の活用の方法を明らかにしつつ、「氷壁」のモチーフを考えてみたい。

結論を先に記すと、「氷壁」は、登攀中にナイロン・ザイルが切れパートナーの小坂乙彦を喪った登山家の主人公魚津恭太が、「世俗」の中で事件に対する様々な臆測に取り巻かれながらも「孤独」に耐え人間を「信頼」する姿を通して、〈アルピニズム〉に徹した一つの生きる姿を描き出した小説かと思われる。従って「氷壁」に関する次の二つの論考、すなわち、「山」と「華やかに変幻する世俗」とを「二元的」に「対立」させつつ、「山」を「ストイシズムあるいは誠実の象徴」として表わした小説と論じる福田宏年氏の「山岳小説について—氷壁を中心に—」[5]（昭32・12『山と高原』）や、「自然対都会」の「対立」を描きながら、「登攀行為の孤独さと生命感」を「鮮やかに浮び上がら」せた小説と解釈する佐伯彰一氏の「解説」（新潮社版『井上靖文庫』12、昭37・4）と、モチーフ分析の結果において本論は重なるところがある。しかし、福田宏年氏は「山」が「ストイシズムの象徴」である根拠として、魚津が八代美那子への思慕を断ち切るために穂高滝谷の岩壁に挑み、落石の中を前進して遭難死する物語のクライマックスを挙げ、佐伯彰一氏は「登攀行為の孤独さと生命感」を感じさせる描写として、「ザッハリッヒな文体」で記され、「張りつめ」た「美し」さを見せる「魚津と小坂の登攀を描いた部分」を挙げ、ともに「世俗（都会）」に対する「山（自然）」なるものの精神を、山それじたいを描いた場面から読み取っている。対して本論では、むしろ都会における魚津の姿から「氷壁」における〈アルピニズム〉を汲み取り、かつそのモチーフをできる限り資料を通して裏付けながら論じていきたい。

以下、モデルと小説との事実関係に目を配りつつ、登山家の魚津がどのように描かれているのか考察する。

一——（1）

考察にあたって、『ナイロン・ザイル事件』の中で特に「前穂高東壁事件[6]」と呼ばれていることの発端となったザイル切断事件について、その小説との事実関係をまず確認したい。

事実と小説とを比較してすぐに気付かされるのは、登山パーティの人数や遭難者の社会的身分などに大きな違いが認められることである。『ナイロン・ザイル事件[7]』によれば、実際の遭難は、三重県

鈴鹿市の岩稜会が、「リーダー石原一郎[8]（福岡県直方市殿町）」以下「十二名[9]」のメンバーで、「昭和二十九年十二月二十四日から三十年一月中頃までの予定」で「奥又白（オクマタシロ）（標高二千五百米）にテントを設営」して行った「冬期合宿」中に起こった。問題の前穂東壁の登攀は、「合宿の三つの目的の中の一つ」として、「リーダー石原国利（註、当時中央大生、二十四歳）、若山五朗（註、当時三重大生、十九歳）、沢田栄介（註、当時三重大生、二十一歳）の三名[10]」で行ったもので、元旦に出発し、その日は日没のため「頂上直下約三十米」の「岩棚で一夜を明かし」た後、「翌二日朝」石原と若山が「先頭を交代」した直後にナイロン・ザイルが切れて若山が墜落、行方不明となったのである。

つまり、既に木谷喜美枝氏も『「氷壁」の世界[11]』で指摘しているように、事実は十二名で行った山岳会の合宿中に起こったことで、現場は三名の登攀であったのに対し、「氷壁」では友人同士の二名の山行として描き、また二十歳前後の学生を三十を少し出た社会人に改めているのである。ただし、同じ木谷氏による「事実は関西在住の人人だが、『氷壁』では東京を舞台としている」との指摘は、必ずしも適切でない。岩稜会の本部は三重県鈴鹿市だが、遭難者の一人であり、魚津のモデルに該当する石原国利氏は当時中央大学の学生で、「東京都世田谷区[12]」に在住していたからである。加えて、やはり木谷氏が「事実は三人とも転落し、二人が助かったとあるが、『氷壁』では助かった一人は転落しなかった」と記しているのは、前述のように、木谷氏が参考に用いた「前穂で三重大生遭難」という見出しの記事（昭30・1・4『朝日新聞』夕刊）の誤りで、実際においても転落したのは若山氏一人であった。魚津と小坂の登攀の描写じたいは、頂上直下の岩棚での二人のビバークや、「トップを交替（マヽ）」した直後の小坂の墜落など、むしろ事実に忠実に記されている。

以上より、井上靖は山での行動の描写においては事実をできる限り活かしながらも、その他の設定は自らのモチーフを強調する形に改めていると言えよう。その点では、木谷氏も「小坂と魚津、二人での登攀に改変したこと」から「友情の物語」という「テーマ」の浮上を読み取っているが、しかし、井上靖が「氷壁」では「いいわけがどこにもできない立場に立っている人間を書きたいと思っていた」と発言している[13]ことを、この改変と併せて考えると、また違った角度からモチーフが浮かび上がってくるようにも思われる。

すなわち井上靖は、目撃者の全くいない氷壁で魚津がただ一人生き残る設定に改めることで、ナイロン・ザイルの切断に向けられる様々な疑惑に対して、なかなか「いいわけ」の「できない」彼の立場を強く打ち出そうとした、と考えられるのである。このことは、小説では魚津と小坂のパーティのみでナイロン・ザイルが切断しているのに対し、事実では岩稜会のこの事件の前後に、同様の事故が

発生していたことからも確認される。昭和二十九年十二月二十八日に東雲山渓会が明神五峯東壁で、三十年一月三日に大阪市立大学山岳部が前穂高北尾根で、ともに死者こそ出さなかったが、ナイロン・ザイルの切断に遭っている。これらの事故はナイロン・ザイルの弱点の裏付けとして、その関係資料が『ナイロン・ザイル事件』に収録されている。[14] 魚津の「いいわけ」の味方となる二つの事件を、作者は取り除いたと言うことができよう。

こうした改変に加えて、学生から社会人へ、しかも使用したザイルのメーカー佐倉製綱の兄弟会社である新東亜商事の社員へと、魚津の身分を改めているところにも、やはり彼の立場を厳しく追い込もうとする作者の狙いが窺われる。この設定によって、ザイル切断の事実よりも会社の利益を優先する企業社会の圧力が直接押し被さることになり、魚津の「いいわけ」は、たとえ正しくとも、ますます通りにくくなってくるからである。

しかも井上靖は、事件発生に先立って、小坂と人妻八代美那子との関係、特に美那子から小坂への交際の拒否を描いている。もちろんこれは作者の創作[15]であり、この小坂の失恋によって、彼の墜死には「自殺」の疑惑が加えられ、魚津の立場がまた深く追い込まれるとともに、魚津自身、友の死に不安を抱かされることにもなったと考えられよう。

かくて魚津はそのナイロン・ザイル切断に関して世間から、「技術的に何か失敗があったのではないか」とか、「アイゼンででも踏んで、傷をつけていたのではあるまいか」とか、切れたのではなく「ザイルが解けた」のではないかとか、「小坂の自殺事件」ではないかとか、はたまた魚津が「自分の生命が惜しくて」「切った」のではないかなどと、様々な疑惑の目に晒されることになる。「世俗」に飛び交う「勝手」な「臆測」の中で、自分の言うことを誰も「素直に信じてくれ」ず、「周囲の人から自分が正しく理解されていない」魚津の「孤独」が「氷壁」には描かれているのである。

一―(2)

ここでこのような「氷壁」の「孤独」のモチーフと、作者の芥川賞受賞直後の長篇「黯い潮」(昭25・7~10『文藝春秋』)との関わりについて、言及しておきたい。連載の前年に実際に起こった下山事件に材を取りながら、フィクションとして創作された「黯い潮」は、K紙の主任記者速水卓夫を主人公に据えている。作者はその速水の過去として、十六年前に妻のはるみが流行歌手の如月雅彦と心中し、マスコミから「興味本位」に報道された事件を設定し、以来「一切の臆測」を激しく憎むようになった速水が、下山総裁の死因に際して、自殺か、他殺か、世間に様々に飛び交う「臆測」と対立し、次第に「孤独」を深めていく姿を描いている。

「氷壁」の魚津の「孤独」は、この「黯い潮」における速水の

「孤独」を受け継ぐものだと見做してよいだろう。しかもそれは、単なる「孤独」のモチーフの継承だけではなく、主人公を「孤独」に追い込む「臆測」のイメージにおいても、両作品には通ずるものが認められるようである。

「氷壁」の冒頭を見ると、穂高から帰った魚津が目にした東京の夜景に感じた印象を、「都会の喧噪」とか「世俗の渦巻き」という言葉で表わし、さらに小坂と八代美那子の過失に触れる際には、「人事関係の渦」とか「スキャンダルの渦中」という書き方もしている。これらの言葉に佐伯彰一氏は、「山の静けさ」との対比を見ているが[16]、その対比はやがて魚津を「孤独」に追い込んでいくものの暗示でもあるようだ。例えば、小坂の遺体が発見されたことで、小坂の自殺説等の疑惑が晴れた場面において、魚津は「実験だの、新聞記事だのといったあらゆる下界の騒音が、ひどくくだらない愚劣なものに思えて来る」と感じている。そして一度は小坂の遺書めいた言葉が出てこないかと心配した自分を振り返って、「自分もまた周囲の人たちの作り出す世俗の渦巻の中に巻き込まれていたのだと思」っている。つまり、「実験」や「新聞記事」から派生して広がってゆく世間の「臆測」は、後から思えば愚劣な「下界の騒音」に過ぎない。がしかし、それは一度は魚津自身をも「巻き込」み、小坂の死因に不安を抱かせ、「孤独」に追い込んでいく「世俗の渦巻き」でもあったのである。

対して「黯い潮」では、かつて速水の憎んだ、妻の死に向けられた「世間の眼」を、「傲岸などす黒い大きい流れ」のイメージによってまず描いている。次いでライバル各紙の下山他殺説に対して、「自殺説」を採って孤立した速水の心境を「壁の向うは何ものかが烈しく渦巻いていた。ひどく騒がしく猥雑だった」というイメージに表象し、さらには「都会の背部」から沸き上がる「囂々たる騒音」とか、編輯局の「騒がしい渦」といった言葉と「臆測」を憎む彼の思いとが重ねられている。都会の〈騒々しい渦〉のごときものとして、「臆測」は表現されているのである。[17] このような「黯い潮」におけるイメージの造形が、「氷壁」へと流れていったことは言うまでもないだろう。

だが「氷壁」は、「黯い潮」をそのままに継承しているのではもちろんない。例えば、速水は物語の最後に恩師佐竹雨山から勧められた娘景子との結婚を断わるのに対して、魚津は、これも物語の終わり近くで、小坂の妹かおると結婚の約束をし、「今までとは異った世界へ一歩踏み出」そうとしている。この相違を「孤独」に即して捉え直してみると、「黯い潮」が速水の「人生に対する受身の、その傍観者的姿勢」をより強調しているのに対して、「氷壁」は「世俗の渦巻き」に負けまいとして耐える魚津の強い意志を描くことに重点がおかれているということではないだろうか。例えば、公開実験でナイロン・ザイルの強さが証明され、厳しい状況に立たさ

れた魚津の心境が次のように描かれている。

確かにいま自分はあの白い冷たいごつごつした氷壁の一角に取りついている時と同じ気持だと思った。

手は岩角に触れている。足は小さい岩角の上に立っている。周囲には誰も居ない。岩壁に取りついているのは自分一人である。絶えず落雪が不気味な音を立てている。しかし、おれは落ちはしないぞと、魚津は思った。

苦しい立場を一人で耐え、乗り越えようとする魚津の決意が、困難な岩壁を登る自らのイメージと重ねられている。実はこのような魚津の姿にこそ、この小説の主要モチーフの一つが存するのではないかと考えられる。井上靖は「氷壁」連載の三年少し前、「登山愛好」（昭28・7・21『都新聞』）と題するエッセイで次のように書いている。

写真雑誌でイギリスのヒマラヤ遠征隊の写真を見た。山頂へ登ったという二人の登山家は、なかなかいい顔をしていた。隊長もまたちょっとそこらでは見当らない立派な顔をしていた。（中略）

私が登山家の顔が好きなのは、登山家の顔が、自分などの持たぬ孤独に耐える凛々しい、清潔な強いものをそなえているからだと思う。

同じ文章の中で井上靖は、「登山記録」を「西域旅行記」とともに、「征服と冒険の要素を持ち、克己と忍苦の記録に他ならぬ」ものだと言い、「こうしたものを読むのは、小説を読むより好きである」とも記している。

右に記された井上靖の登山観は、「世俗の渦巻き」に巻き込まれた魚津恭太に反映されているのではないだろうか。つまり「氷壁」は、都会においても氷壁に一人で挑むごとき「克己と忍苦」の意志を貫き「孤独に耐える」魚津の姿を描くことで、一つの「登山家」のイメージを造形した小説ではないかと、ひとまず考えられるのである。

二―（1）

次に魚津の「孤独」に関連して、彼に決定的な打撃を与えた公開実験の事実関係について、やはり『ナイロン・ザイル事件』を参考に確認しておきたい。

例えば作中の公開実験は、その責任者であり、東邦化工専務、工学博士の八代教之助が、魚津と彼の上司常盤大作に向かって、「実験はあくまで良心的にやりたいと思います」とあらかじめ断わっている。また早くから公開実験の実施を提案していた常盤大作も、「実験方法は、僕が責任をもって良心的なものにする」と言い、さらに実験終了後、八代教之助夫人の美那子までもが、「主人は良心的に実験をやったと思いますわ」と話している。それが「良心的」

に行われたであろうことが、繰り返し強調されているのである。

一方、昭和三十年四月二十九日に愛知県蒲郡の東京製綱工場内で行われた実際の公開実験は、『ナイロン・ザイル事件』の中で特に「蒲郡事件」という呼び方をされ、その責任者であった大阪大学教授篠田軍治氏が、石原国利氏の名において、昭和三十一年六月二十三日付で「名誉毀損罪」によって告訴されていることに注意しなければならない。その関係資料[18]によると、篠田教授は「ナイロンザイルが鋭い岩角に弱」いことを「知悉し乍ら」、あえて「エッヂの円い岩角を用いて」公開実験を行い、「参観者にナイロンザイルは」「麻ザイルより数倍強いとの事実に反する認識を与え」、前穂東壁でナイロン・ザイルの切断に遭った石原国利氏の「名誉を毀損した」というのが告訴された理由である。この告訴問題じたいは、翌三十二年七月二十三日付で不起訴処分となったものの、その後もナイロン・ザイルの弱点を訴え続けた岩稜会の主張は、事件発生から約二十年後の五十年六月、通産省がザイルの安全基準を制定することでまず受け入れられ、次いで日本山岳会が同会編集の五十二年版『山日記』に、同書の三十一年版にナイロン・ザイルが岩角で強いことを記した篠田教授の文章を掲載したことについて、「編集上不行届」で「遺憾」だと謝罪する文章を発表するに及び、その正当性は、はっきり証明された[19]。その公開実験は問題の所在が明らかになった今日から見ると、およそ「良心的」とは言い難い内容であり、当時においても、少なくとも岩稜会にとっては「良心的」と言えるものではなかったと考えられる。それを作中のように描いているところに、この小説における井上靖の一つの大きな創意が認められよう。

こうした書き方をした理由の一つとして、当時はまだ論争の渦中にあったが故に、事件の真相について、ある程度ぼかして記さねばならなかったことがあったかもしれない。が、もちろんそれだけではない。井上靖の意図やその文学の特色が、やはりそこに現れているようである。

まずこのような創作の姿勢から、悪役を作ろうとしない作者の意識が窺われる。実際石岡繁雄氏は、モデルの立場から、真相をもっとはっきり書いて欲しいと訴えた際に、井上靖が「それでは善玉、悪玉小説になって井上文学ではなくなってしまう」と答えたことを回想している[20]。どぎつい暴露を避けた結果、「氷壁」は、佐伯彰一氏から、その作品世界に「一切の悪が、あまりに完全に閉め出されていること」が「不満」だと批判された[21]。しかしその一方で、甘くソフトな口当たりの物語として仕上がり、だからこそ多くの読者に迎えられたとも考えられる。八代教之助像を一つの源にして、良くも悪くも、「氷壁」の大衆性が生み出されているのかもしれない。

そしてそれ以上に注目したいのは、この公開実験の後、常盤大作

に次のように言わせていることである。まず常盤は、魚津に向かって、「八代教之助氏は立派な人間だ。おれは彼を信じる。君も彼を信じなければならぬ。信じられるか」と言い、魚津から「もちろん、信じます」との答えを得た後、「信じた以上は、実験の結果に文句を言うな」と命令した上で、次のように話す。

「人間が人間を信じるということは難しいことだ。しかし、君にはこれをやってもらわねばならぬ。（中略）おれだって、君だって、八代教之助という人間は信じることができるのだ。ただ、たまたま彼が受持った実験の結果が、どうしたものか、予期していたことに反しただけの話だ（中略）」

この時魚津は「常盤の言葉の底を流れている意味がよくは理解できなかった」と思っているが、確かにこの常盤の台詞の意味するところは、今一つわかりにくい。ただ、この言葉は、公開実験が「良心的」であることを強調していたからこそ、意味を持ちえたものだと言うことはできよう。八代像とその公開実験に見る井上靖の創作は、あるいはこの言葉を常盤に吐かせるためにあったのかもしれない。さらに魚津が滝谷山行で遭難死し、一部の人から彼に自殺の疑いがかけられる物語の最後の場面でも、常盤は「結局は、人間を信じるか信じないかですよ。僕は魚津君が自殺するような人間でないことを信じているだけです」と語り、「人間と人間との交渉は結局信じるか、信じないかですよ。僕は魚津君という人間を信じます」と述べている。井上靖は常盤を魚津の指南役、あるいは物語の狂言廻しとして使い、「人間を信じる」こととは何かを問おうとしているのではないだろうか。つまり、「世俗」の中で魚津が孤独に耐えながら、人間をどのように信ずるかを描くことにもう一つのモチーフがあるのではないかと考えられるのである。

二―（2）

このいわば「信頼」のモチーフを考える上で、見逃してならないのは、言うまでもなく、魚津が友小坂に寄せる思いであろう。特に小坂と八代美那子の関係という、小坂の自殺を疑わせる設定を考慮に入れると、とりわけ小坂の死因に関する疑惑に彼がどのように対したかに目を向ける必要があろう。

例えば、小坂の失恋自殺の不安に苦しむ美那子から、ザイルは本当に切れたのかと尋ねられた際、魚津の反応が次のように描かれている。

「大丈夫です。御心配要りませんよ」

魚津はそんな言い方で、相手の妄想を一掃しようとした。そしてそう言いながら、あの事件が起った瞬間にピッケルにしがみついている自分の体になんのショックもなかったことを思い出した。そしてその時自分を襲った小さい疑惑がもう一度こんどはもう少しはっきりした形で魚津の頭の中へ蘇って来るのを

感じた。しかし、

「ザイルは切れたんですよ」

魚津は力をこめて言い切った。こう言い切ったのは、小坂乙彦が絶対にそのような形で自殺する男ではないということを、この短い時間の間に改めて信じたからであった。小坂は登山家ではないか。（中略）登山家はいくらでも山のために山で生命を棄てるが、下界のごたごたした人間関係のために、決して山で生命を棄てることはないだろう。

魚津は「小さい疑惑」を抱かされつつも、小坂が「登山家」であることを思い、山で「自殺する男ではない」ことを信じた。その後も魚津は、美那子その他の人々から、幾度か同じ疑惑を持ちかけられ、自身不安を抱いたこともあったが、その度に「小坂はどんな事情があっても、山で死ぬような男では」ないと考え、自殺説を否定している。魚津は「登山家」同士の立場から、小坂を「信じ」通したのである。

この魚津の「信頼」は、小坂の遺体が発見され、自殺の疑惑が解消された後も、形を変えて貫かれているようである。

魚津は美那子に自分もいつか知らずに惹かれてゆき、小坂の遺体を現地で荼毘に付した以降は、その「ひそかな美那子への思慕」をはっきり自覚する。しかし魚津は、常盤から八代宅を「二度と訪問してはいけない」と忠告され、また自分でも「いけないことはやめるべき」だと考え、その思いを断ち切る決意をする。彼は美那子を呼び出し、「愛情の告白」をするとともに、「もうお訪ねもしなければ、お電話もしません」と「別れの宣言」をしたのである。その際に魚津は「いけない」と思う理由について、それが「二人の人間のため」であり、その二人とは「一人は八代さんで、一人は小坂」だと説明している。このうち、「八代さん」のために「いけない」とは、おそらく「人の奥さん」を「好きになって」は「いけない」という意味であろう。一方、「小坂のために」魚津がそのように思う理由は、例えば小坂の生前、二人の行き付けの料亭「浜岸」で、魚津が小坂に美那子への思いをあきらめることを勧める場面などにその答えが記されているようである。そこで魚津は、八代美那子を山へ連れていきたいという小坂の空想を聞き、自分でも「もし山へ連れて行くとすれば、なるほど八代美那子を連れて行ったらいいだろうな」と考える。そして自分がそのような思いを抱いたことで、次のような心境に陥る。

自分の友達が美那子に対する執着を絶ち切ろうとして苦しんでいる時、人もあろうに、その同じ相手を自分もまた山へ連れて行く相手として選ぼうとしていたことは、友に対する不信のうちでこれほど大きいものはないわけだった。魚津は自分で、そんな自分が厭だった。

小坂が思いを断ち切ることで苦しんだ、その八代美那子に恋情を

抱くことは、魚津にとって、まさに「友に対する不信」の行為であった。魚津が美那子に「別れの宣言」をしたのは、小坂の「信頼」を裏切るまいとする思いからでもあった。

このように魚津は、小坂を「信じ」、また彼に対する背信行為をしない意志を貫いている。そしてその「信頼」のモチーフは、美那子への「別れの宣言」の後、小坂の妹かおると結婚の約束をし、「八代美那子への執着を払い落とす」ために滝谷登攀を決行することで、さらに徹底されているのではないかと考えられる。すなわち、兄小坂の火葬の直後にかおるが魚津に求婚したことについて、「小坂乙彦のかおるへの転生（メタモルフォーゼ）を意味する」という工藤茂氏の分析（「挽歌の系譜―『氷壁』を軸にして―」[22]〈昭47・4『國學院雑誌』〉）を念頭に置いた上で、かおるとの結婚を決意した魚津の思いが、「自分はこの娘と、小坂乙彦の妹と結婚すべきだ」（傍点引用者）と記されていることを併せて考えると、その結婚の約束は、魚津と小坂の「信頼」関係の上に成立したものではないかと思われるのである。しかもかおるは、魚津の言葉を多くの人間が信じようとしない中にあって、彼の「言うことを一つ一つ素直に信ずる魂」の持ち主として描かれている。婚約の後に「美那子の幻影を払い落す」ことを目的とした山行に魚津が向かったのは、小坂乙彦の妹であり、そして自分を信じてくれるかおるを裏切らない人間になろうとするが故であったとも考えられるのである。

ここに来て、前穂東壁の登攀に出かける直前、魚津が常盤との議論で語った、次のような登山観が大変重要な意味を持って見えてくる。魚津は「登山は単なるスポーツでは」なく、「スポーツ、プラス、アルファ」だと主張し、その「アルファ」について、次のように話すのである。

「（前略）フェアプレーの精神の非常に純粋なものとでも言いましょうか。山頂を極めたか極めないかは誰も見てはいないんです」

右の言葉を補って説明すれば、登山は「誰も見てはいない」場所で行われる故に、いつも相手を信じ、相手を裏切らない行動をしなければならない、それが「フェアプレーの精神の非常に純粋なもの」ということになろう。登山は人間に対する「信頼」の上に成り立つスポーツだと言おうとしているかのようである。そしてこの登山観から、「氷壁」を捉え直してみると、魚津は登山家の「フェアプレーの精神」に徹した男だと言うことになるのではないか。さらに付け加えれば、八代教之助を「信じろ」と常盤が言ったのも、魚津のよき理解者として、魚津にこの「フェアプレーの精神」を忘れてはならないという指示であったと考えられなくもない。「エンジニア」の立場から「良心的」な実験をやったに違いない八代教之助に対して、その「実験そのものを疑ぐる」ことは、ある意味で「フェアプレーの精神」に反しかねないからである。当の魚津は、八代という

「人間は信じ」ることができた。だが、実験の結果については決して承服したわけでなく、「その実験方法になにか間違いはなかったか」と言いたい気持ちがあった。しかし彼は「その誘惑に耐えた」。常盤の助言によって、魚津は登山家の生き方を辛くも崩さずに済んだのである。

三

以上の検討から、魚津は「登山家」として「孤独に耐え」、そしてまた「登山家」として小坂を「信頼」し抜いた男と見てよかろう。井上靖は「世俗」の中での魚津の「孤独」と「信頼」から、登山家の精神、すなわち〈アルピニズム〉を浮かび上がらせようとしたのではないか。それは次のような執筆のいきさつからも裏付けられる。

井上靖は『過ぎ去りし日日』[23]で、『ナイロン・ザイル事件』を読んだ際、直ちにそれを「小説の材料」にしたいと思ったことを記した上で、さらに次のように続けている。

私は登山家ではないので、雪の穂高で起った事件について、いかなる判断もくだすことはできなかった。小説に取り扱うにしても、第三者として事件を客観的に書く以外仕方ないと思った。

しかし、この私の考えを完全にくつがえしたのは、安川茂雄氏の紹介で、事件の渦中の人物である若い石原国利氏に会い、その人柄に打たれたことであった。

—でも、実際に切れたんですからね。

という短い言葉を繰り返しているだけの青年の眼には、いささかの濁りもなかった。私は氏の言うように、ザイルは切れたのに違いないと思った。作家としては、この眼を信ずる他はなかった。（中略）遭難者の兄である石岡繁雄氏もまた、この石原氏の眼を信じているのであろうと思った。

私は「氷壁」という小説の主人公を、石原氏の立場に置いた。

井上靖は、石原国利氏の「人柄に打たれ」、「石原氏の眼を信じて」、主人公の魚津を「石原氏の立場に置いた」。この作者のモデルに対する「信頼」が、「氷壁」に十二分に反映されていることは言うまでもない。特に常盤大作が魚津に寄せる「信頼」、例えば「僕は魚津君という人間を信じます」という言葉などは、井上靖の石原国利氏への思いがそのまま現れているかのようである。しかも、その石原氏ら岩稜会は、『ナイロン・ザイル事件』の本文篇[24]で、「フェアプレイの精神に立つて、すべての私情私怨をすて」て、「蒲郡事件の追求」にあたるとの決意を記している。「フェアプレイ」または「フェアプレイの精神」という言葉が、そこには合計六回も登場するのである。それらの意味は、魚津が用いる同じ言葉の

表わすところと必ずしも一致しないが、事件追求の姿勢を表明したその言葉と、井上靖の石原氏への「信頼」とが結び合って、魚津恭太像の形成に少なからぬ影響を与えたことは確かであろう。さらにその本文篇を読んでいくと、岩稜会は本来「俗世間からたとえわずかの時間でもはなれ、神のように、純粋な場所ですべてを忘れて生活する喜びをえようとすること」を目的とする団体だが、しかし事件の追求にあたって、「前人未踏の困難な岩壁に立ち向つた時のそれと異ならない」気持ちで「ぶつかつてゆく」という記述を見ることもできる。もともと「孤独に耐える」登山家の顔が好きだった井上靖は、このような『ナイロン・ザイル事件』の言葉から想像を広げ、先の氷壁に一人で取りつく魚津のイメージを創り上げたと言えるかもしれない。

かくて石原国利氏との出会いや、『ナイロン・ザイル事件』に見る岩稜会の事件追求の姿勢が井上靖に創作のヒントを与え、そこに自らの登山観や石原氏への「信頼」を結びつけながらモチーフを大きく膨らませてゆき、「氷壁」を生み出していったと言えそうである。

おわりに

「氷壁」は、魚津恭太の〈アルピニズム〉を「世俗」の中で描き出した小説と考えられる。そこには〈アルピニズム〉という形を取りながら、「孤独」と「信頼」というモチーフが流れており、やや甘口の大衆性を含みつつも、現代社会の様々な困難に自ら挑み、克服しようとする一つの生の有り様が示されていると言えよう。そしてこの魚津の「孤独」と「信頼」の姿勢は、井上文学の主要モチーフのありかを窺わせるものでもあった。それ故に「氷壁」はただに時事的な話題を素材にして多くの読者を獲得したベストセラー小説にとどまらず、作者の代表作の一つになり得ているのではないだろうか。

註

(1)「自作解題」(新潮社版『井上靖小説全集』13、昭48・8)、「過ぎ去りし日日」(原題「私の履歴書」〈昭52・1・1、3〜31『日本経済新聞』〉昭52・6、日本経済新聞社)参照。ただし、これらの中で井上靖は、報告書のタイトルを「ナイロン・ザイル事件報告書」と記しているが、本論に記した『ナイロン・ザイル事件』が正しい。

(2) 福田宏年氏はこれら二つの文章で前穂高東壁における遭難事故の日付を「昭和三十一年一月二日」と記しているが、これは単純な誤り。「昭和三十年一月二日」が正しい。

(3) 木谷喜美枝氏は『「氷壁」の世界』で、「前穂で三重大生遭難」という見出しの次のような新聞記事(昭30・1・4『朝日新聞』夕刊)を参考に用いている。ここに不正確な部分がいくつか認められることは、以下の註を含めて本論に記す通りである。

前穂で三重大生遭難

【松本発】愛知県海部郡佐織町見越、三重大学一年生若山五郎君(一

九）は鈴鹿市神戸岩稜会石岡繁雄リーダーら一行十三人で北アルプス前穂高岳登頂のため昨年末二十二日頂上直下の奥又白池にベースキャンプを設営、一日頂上へ向って一行の鈴鹿市神戸寺家町沢田栄介（二一）福岡県直方市殿町、石原国利（二五）両君と出かけたが、頂上手前でザイルが切れ三人とも岩間に転落した。沢田、石原両君は奇跡的に助かったが若山君は行方不明となった。

（4）平成十一年八月十五日から十六日にかけて、三重県鈴鹿市の石岡繁雄氏自宅（石岡高所安全研究所）にてお話を伺った。

（5）福田宏年氏はこの論考の他にも、「解説」（新潮社版『井上靖小説全集』13）や『増補井上靖評伝覚』で、ほぼ同じ趣旨のモチーフ分析をしている。

（6）『ナイロン・ザイル事件』の本文篇では、「ナイロンザイル事件」という場合は事件の総称であり、このうち三十年一月二日のザイル切断事故を「前穂高東壁事件」、同年四月二十九日の蒲郡での公開実験を「蒲郡事件」と区別して呼んでいる。

（7）以下の記述は『ナイロン・ザイル事件』関係資料篇中の次の資料による（資料番号、資料名、資料年月日を記す。以下同じ）。資料番号12「産業経済新聞、前穂高東壁の遭難を報道する記事」（昭30・1・5）、同14「同行者の遭難報告並びに遭難直後の岩稜会の見解」（昭30・1・8）、同18「朝日新聞（三重版）北ア遭難体験記」（昭30・1・13）、同92「『会員石原国利の篠田氏への告訴に関する見解』並びに『告訴状抜粋』」（昭31・6・22）。

（8）「石岡繁雄リーダー」との『朝日新聞』夕刊の記事〈註（3）〉は誤り。石岡繁雄氏は当時岩稜会の代表だったが、前年現役を引退し、この冬期合宿には不参加、チーフリーダーは石原国利氏の兄石原一郎氏であった（資料番号92および『ナイロンザイル事件報告書』〈昭52・7、岩稜会〉参照）。

＊岩稜会は昭和五十二年七月に『ナイロンザイル事件報告書』を改めて編集し、発行した。同書と三十一年七月発行の『ナイロン・ザイル事件』との混同に注意されたい。なお、註（1）にも記したように、井上靖が「自作解題」や『過ぎ去りし日日』で「氷壁」執筆の参考資料として挙げている「ナイロン・ザイル事件報告書」という書名は、小説連載から約二十年後に発行された同書を指すとは考えられず、『ナイロン・ザイル事件』の誤りである。

（9）『朝日新聞』夕刊の記事〈註（3）〉には「十三名」とあり、『ナイロン・ザイル事件』関係資料篇にも、「十三名」（資料番号12、同18）と「十二名」（同92）の二つの記述が見られる。ここでは、より正確と思われる「告訴状抜粋」（同92）記載の「十二名」に従った。なお、石岡繁雄氏は「ナイロンザイル切断事件の真相」（昭33・7『岩と雪』I）と題する文章で、岩稜会パーティ全体の人数を「十二人」と記している。

（10）三名の肩書きと年齢については、『朝日新聞』夕刊〈註（3）〉および『ナイロン・ザイル事件』関係資料篇（資料番号12、同18）の間でばらつきが見られたため、筆者が石岡繁雄氏に直接確認の上で記した。

（11）ただし、木谷氏は『朝日新聞』夕刊の記事〈註（3）〉に拠っているために、岩稜会パーティ全体の人数を「十三名」と記している。

（12）資料番号92による。なお『朝日新聞』夕刊〈註（3）〉の石原国利氏の住所に関する記述は誤り。

（13）講演「小説について」（昭38・3『図書』）

（14）資料番号31「日本山岳会関西支部でのザイル検討会、要旨」（昭30・2・9）には、これら三つのナイロン・ザイル切断事故が議題に上ったことが記されている。また同21は、同じ事故に遭った「大阪市立大学山岳部大島健司氏」が石岡氏に宛てた「手紙」（昭30・1・16）を載せたものであ

り、さらに同14中の「遭難報告書」（註、石岡繁雄氏が事故の直後にまとめ、各新聞社に送ったもの）には「東雲山渓会」の事故が言及されている。

(15) 石岡繁雄氏は『ナイロンザイル事件報告書』で次のように回想している。「なお井上氏は、適当なロマンスをつけたいということであった。小説になったのを見ると遭難した若山（小説では小坂）と、篠田氏（八代教之助）の奥さん（美奈子（ママ））との間に、肉体関係があることになっており、これには驚いた（後略）」

(16) 「解説」（新潮社版『井上靖文庫』12）

(17) 拙論「傲岸なとす黒い流れ—井上靖『黯い潮』考—」（平11・2『国語国文研究と教育』）参照。

(18) 資料番号92

(19) 以上の記述は『ナイロンザイル事件報告書』による。

(20) 註(19)に同じ。

(21) 註(16)に同じ。

(22) 『挽歌の系譜—井上靖の世界—』（昭58・4、日験）に収録。

(23) 註(1)前出。

(24) 以下の本文は、「三、関連事項（へ）我々の反省事項」に記されている。

〔付記〕

本論は井上靖研究会創立記念大会（平11・12・5、於國學院大学）における口頭発表を再考察の上、文章化したものである。井上靖の作品引用は、新潮社版『井上靖全集』（平7・4～12・4）による。また引用文中、旧字体は新字体に改めた。

なお執筆にあたって、石岡繁雄氏に多大なご協力を頂いた。記して厚くお礼申し上げる。

——たかぎ・のぶゆき、鈴峯女子高等学校非常勤講師——